

# 平成 27 年度水産研究成果情報

課題名: アゲマキ母貝集団の効果的創出方法の検討

## [背景・ねらい]

アゲマキは、かつては佐賀県有明海の泥干潟で多く見られる二枚貝として、漁業生産の上でも極めて重要な位置を占めていたが、平成 2～3 年にかけて激減し、平成 4 年以降は 20 年以上ほとんど漁獲がない状態が続いている。

このため、種苗生産・放流技術を開発し、アゲマキ母貝集団の効果的な創出方法を確立することにより、資源の再生産力回復を図る。

## [成果]

- (1) 平成 21 年度以降の 7 ヶ年で、放流用の稚貝(殻長約 8mm) 約 656 万個を生産し、これらを佐賀県沿岸の 11 地区に放流した。このうち、太良町地先に放流したアゲマキは比較的良好に生残し、放流 2 年後には漁獲サイズ(70mm)を超え、順調に成長していることを確認した。また、鹿島市浜地先、七浦地先、佐賀市などの各地先に放流した種苗についても、十分に母貝となる程度の密度で生残している。

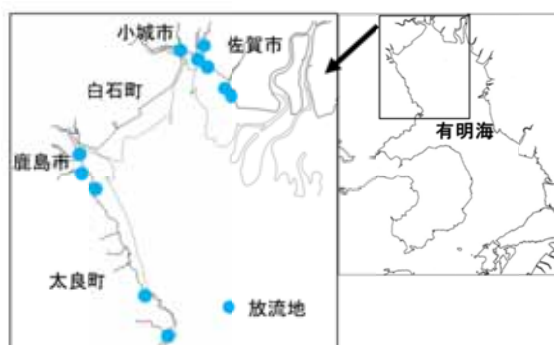


図 1 これまでの種苗放流地

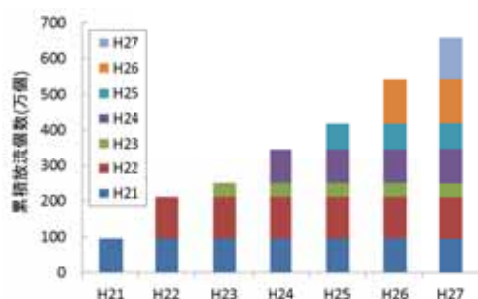


図 2 累積放流個数の推移

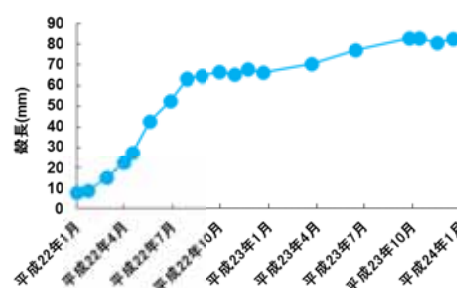


図 3 平成 22 年 1 月に太良町地先で放流したアゲマキの成長

- (2) これまでに、1 年以上生残した放流群は、9 月から 11 月にかけて肥満度が低下し、生殖腺組織切片の状況からも産卵したことが推測されたことから母貝集団として機能していると思われた。また、沖合域で浮遊幼生が検出されている。
- (3) 放流直後の種苗の散逸を抑制する方法として、塩化ビニル管を干潟に立てた区(以下、塩ビ区)を対照として、放流区画内を 1mm のネットで囲んだ試験区(以下、囲網区)と、さらに囲網区を 1mm 目合いの網で被覆した試験区(以下、被覆網区)を比較したところ、放流からおよそ 1 ヶ月経過後の生残率は、囲網区の 9% に比べ、被覆網区は 39% であった。被覆網を施すことにより、放流直後の散逸抑制に一定の効果がみられた。

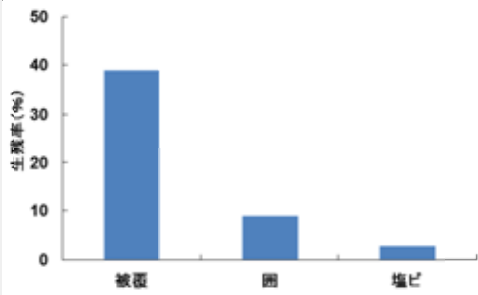


図4 放流から1ヶ月後の各区の平均生残率

[課題・問題点]

- ・被覆網に付着物が付くため、撤去時期の検討。
- ・母貝機能の発現の指標となる浮遊幼生の大量検出。

[今後の対応]

- ・被覆網を用いた散逸対策技術の確立。
- ・浮遊幼生検出にモノクローナル抗体法による検出技術の導入。
- ・資源回復を加速するための、より大規模な種苗生産及び放流の実施。

[その他]

研究期間：平成21年～

研究担当者：資源研究担当 佃 政則